
受け継がれる力

ベヘモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受け継がれる力

【Zコード】

Z0985X

【作者名】

ベヘモス

【あらすじ】

毎夜見る迷路の夢。果てし無く続くと思っていたソレは、ある日突然終わりを迎えた。

迷路の果てに在ったのは不思議な空間。其処で俺は力を渡され、世界に蔓延る影と戦う事になる。

これは、ごく普通に生きて来た少年が謎の存在から力を渡され、世界を蝕む影と戦つて行く物語……。

第一話 受け継ぐ者（前書き）

注意事項。

この作品は【魔法少女リリカルなのは】の世界観やキャラクター・設定等を使っていますが、原作ストーリーとは一切関係の無い物語です。

そう言つのが駄目な方は今すぐブラウザの戻るボタンを押して下さい。

もし、大丈夫だと言つ方は【なのはキャラを使った別の小説】と考
えてお読み下さい。

第一話 受け継ぐ者

俺は今夢を見ている。

夢の中の俺は、白い壁で出来た巨大な迷宮の中を彷徨つている。ちゃんと出口に進めているのか、それとも袋小路に向かっているのかも分からぬ。

なんでこんな夢を見ているのか分からぬが、それでも俺はただ前に向かって歩き続けた。

「お……、た……る……」
「ん……」

今まで眠っていた俺は、誰かに起しきれ徐々に目を覚まし始めた。夢の大迷宮はクリアする事は出来なかつたが、今夜も眠れば起きた地点から続きが始まる。

もう何年も同じ事を繰り返している所為で、すっかりこの夢にも慣れてしまった。

「おきて、たけるくん」
「……おやねからゆうりすな

頭は未だに寝惚けているが、起しきれないと云つ事はコレ以上寝ていると遅刻すると言つ事だ。

俺は眠い田を擦りつつ、今日も起きて来た幼馴染の顔を見た。

「お早う、武君。今日もいい天気だよ」

「……おはよう、なのは。お前は今日も元気だな」

「私が今日も元気なのは、きっと武君のお陰な」

「……意味が分からなって」

俺の名前は【宗谷 武】。海鳴小学校に通いすぐ普通の小学3年生だ。

趣味は身体を動かす事で、特技は……田が良い事か？ いや、これは特技なのか？

……まあ、それは兎も角として、やつを俺を起きて来たのは【高町 なのは】。

ウチのお向いに住んでいる俺の幼馴染だ。

なのはとは生まれた日と病院が一緒で、俺の祖父ちゃんとなのはの父ちゃんが知り合いだ。

祖父ちゃんの繋がりが良く分からぬけど、やつ言った事からなのはとは昔から一緒に暮らしている。……ホント、一緒に暮らして一緒に暮らしている。

「はい、武君」

「ん

今俺達は一緒にテーブルを囲んで朝食を食べている。なのはが手渡して来たのは、炊きたての白米が盛られた飯茶碗だ。

…… そう。なのはは、何時の頃からか俺ん家で食事を取るよつこなつたんだ。

まあ、ご飯と一緒に食べるくらいなら別に問題はない。

ただ、何時の間にかなのはの私物が少しづつ増えていて、気が付いたら俺ん家になのはの自室が出来ていた。……アレを見た時は本気で驚いたよ。部屋に無いのが勉強机くらいだったからな。ウチの両親はなにも言つてこないが、なのはの母ちゃんは泣いてるんじやないのか？

最近はウチに入り浸りだから、自分ん家にも帰つてない氣がするし。

「それじゃ、いつでもま～す」

「いつてきま～す」

「こつてらつしゃい。…なのはちやん。ウチの馬鹿息子の事を宣し

くね」

「はーー！」

「……馬鹿息子ってなんだよ、馬鹿息子って

朝食を食べ終わつた俺達は、何時もの様に一緒に登校する。

俺達が通つ学校は、此処からだと少し遠にから7：30にほん家を出でている。

本音を言つと自転車通学したいんだけど、それには距離が足りないから毎日徒步で通つている。

「あ～あ。私立に通つてる奴等は良いよな。毎日バスで通えるんだから

「そうかな？ 私は歩きの方が好きだよ

「どちら辺が？」

「毎日、武君と手を繋いで通える所

「……なのはつて本当に変わってるよな

「別に変わつても良いもん」

もつ当たり前の事だから気にしなくなつたけど、なのはの奴登下校の時は必ず手を繋いでくる。

それの何が嬉しいのか知らないけど、手を繋ぐと機嫌良く鼻歌を歌い始めたりする。

……そのお陰で、俺はクラスの男子からかわれたてるんだけどな。

まあ、その程度の理由でコイツの手を離したりはしないけど、今日もからかわれるんだろうな。

「……やれやれ」

「ん？ 如何したの武君？」

「いや、学校行きたくねえな～って」

「登校拒否は良くないと思うの」

「分かつてんつて」

何時もと変わらないやり取りをし、俺達は手を繋いだまま学校へ向かつた。

学校も何時ものと変わらず、クラスの男子にからかわれて、何時もと同じ授業を受けて、登校時と同じ様になのはと手を繋いで帰つた。何もかもが何時もと同じだけど、こう言つ毎日が嫌だとは思わない。確かに刺激的な事が起これば良いにな～つて思うけど、劇的な変化は望まない。

ただ、こいつしてなのはと笑つて暮らせればそれで良い……つて、小學生が願う事じゃないな。

学校から帰つて来てから時間が経つて、今は夕食時。

なのはの奴は、何時もの様に俺ん家で夕食を食べている。

昨日もウチで食べてたけど、なのはの母ちやんは何も言つてこない

のかな？ 物凄く今更な気もするけどな。

「やう言えはなのはちゃん。今日はお家に帰るの？」
「うん。今日は泊まっていきます」
「…？ 今日は？ ジヤなくて？ 今日も？ だら」
「どっちにしろ同じだから良いの」
「やうそう。男の子が細かい事気にしないの」
「……細かいのか？」

ウチの母ちゃんは豪快と言つか、大雑把と言つか……兎に角、そんな感じの人だ。

父ちゃんは「普通の人なんだけどな」。如何してこうなったのやら。

なのはが今日も泊まるって知つたら、なのはの母ちゃん泣き出さんじゃないだろうな？

高町家の家族間は大丈夫なのか、本氣で心配になつて来た。

「……」
「あ、小母さん。お母さんに「暫くコッチに泊まる」って伝えて下さい」
「はいはい」

……俺が心配する以前に、もはや手遅れなんじゃないのか？
こんな状況に為つているのに、何も言つてこない高町家つて一体…。

夕食を食べ終わつた後、学校から出た宿題を片付け、居間でテレビ番組を見て、何時もの時間に就寝した。
布団に入ると眠気は直ぐにやってきて、気が付くと何時もの迷路の中にいた。

この迷路に挑戦するのは一体何度も忘れたが、何年も続いているともはや日課みたいなものだ。

夢の中で迷路に挑戦するのが日課つて……我ながら意味が分からん。そう思つてはいるんだけど、道の真ん中でジツとしていても暇なだけだし、今回も頑張るとしますか。

「ゴールを手指して迷路を歩き続ける事、既に一時間以上が経つている。

実際には時計が無いから、感覚的にそれくらい経つた様な気がするだけだ。

相変わらず「ゴールらしき物は見えず、何処まで行つても白い壁。もう見慣れた光景とは言え、もう少し変化が欲しいよな。

コレでゴールに着いて何も無かつたら、今までの頑張りはなんだつたのか丸一日を掛けて考えたい。

「「ゴールはまだかあ～……」

黙つたまま歩き続けるのも気が滅入るし、時折何か独り言を言つてみるけど……特に変化無し。

それどころか、段々と空しく為つて来るから辛い。

いい加減ゴールに辿り着いて欲しい……つて、なんだありや？

ただ歩き続けていると、突如目の前に大きな扉が出現した。

さつ今まで何も無かつたのに、イベントも無しに行き成り現われたな。

まあ、他の道も無くなつてるし、此処がゴールつて事だよな。

……なんだか報われた氣もするけど、どうやって入るんだ？

「戻り戸でも無かれば、押す訳でも無れそうだな」

目の前にある扉を観察してみると、取っ手も無ければ開け方も分からぬ。

ただ何も言わずに目の前に聳え立つだけの扉。

開け方が分からぬ以上、此処で立ち往生するしかない。

「……ヤバイな。本氣で何の為に頑張つて来たのか分からなくなつて來た」

今までは、ゴールに在る物が知りたくて頑張つてきたけど……俺の努力は一体なんだつたんだ？ 僕は決してただの壁を見る為に歩き続けた訳じゃないぞ。

……でも、實際にあるのは開かない扉だけだし……夢の中とは言え、何をやつてるんだ俺？

「あれ、武君？」

「……ん？」

扉の前で立ち往生していると、後ろからなのはに声を掛けられた。今まで誰かと出会うなんて事は無かつたから、今回なのはが出て来るなんて思つてもみなかつた。

しかし、自分の夢にまでアイツが出て来るなんて……俺のプライベートは何処に？

「やつぱり武君なの。こんな夢で会えるなんて思つてなかつたから、凄く嬉しいの！」

「自分の夢つて……何を言つてゐんだ、コレは俺の夢だろ？」

「えつ？ ハレは私の夢なんじゃ……」
「……如何言う事だ？」

この迷路は俺の夢の筈なのに、田の前に居るのはも同じ様に自分の夢だと呟つ。

夢に付いて詳しく知つてゐる訳じやないけど、こんな事つて普通あり得るのか？

俺達は良く分からぬ状況に頭を悩ませて居ると、今まで開かなかつた扉が大きな音を立てて突如開いた。
状況は益々訳の分からぬ事に為つてゐるけど、とりあえずあの扉を潜れつて事かな。

「…………」

「武君。如何するの？」

「行くしかないだろ。此処に居ても何も分からぬんだしな」

「…………そうだね」

「安心しろ。何が遭つてもお前だけは守るから」

「あ、うん！」

俺はなのはの手を確りと握つて扉を潜つた。

扉を抜けると周りの景色が一変し、何処か別の場所に飛ばされた。
俺達の後ろには扉はなく、周りは草が生い茂り、所々に木が生えて
いる。

そして中心には台座が置いてあり、蒼い長剣と白い本が空中に浮んで
いた。

「なんだ此処は？」

「あの剣と本、どうやつて浮んでるんだ？」

「…………疑問に思うところは其処なのかな？」

「だつて、不思議なんだもん」

……確かにのはの言ひ通り、剣と本が浮かんでいるなんて不思議ではある。

だけど、この場所に飛ばされつてのもかなり不思議だと思つた。……やつぱり俺つて細かいのかな？

「でも、この状況は気に為るだろ」

『そんな細かい事氣にしてたら大きく為れねえぞ』

「ぬあッ？！」

突然俺に話しつけてきたのは、白のインナーに青いズボンを着き、蒼いコートを羽織り、動きの邪魔にならないように腰の辺りベルトをした白い髪の男性だった。

顔は如何言つ訳か、目の辺りに影が出来ていてよく見えない。それになんだか、存在が曖昧と言つか……幽霊の様に透き通つている様に見える。

……まさか本物の幽霊じゃないだらうな。

『しかし、こんなガキに継承させないといけないとは……運命つてのも残酷だな』

『そうは言いますが、私達の力を受け継げるのがこの子達だけなのですから、仕方が無いですよ』

「うにゃッ？！ もう一人増えたの！？」

今度現われたのは、黒のインナーと白のスカートを着き、白を基調にした半袖のコートを黒い長髪の着た女性だった。

この人も目の辺りに影が出来ていて顔は良く分からないし、男性と同じ様に透き通つていた。

何処から現われたのか分からぬけど、不思議と恐いとは思わなかつた。

『そ、うは言つがな？極光？。こんなガキ共に戦いを強いるのは流石に心苦しいぞ』

『それは私とて同じ気持ちです。……ですが、此処まで辿り着いてしまつた以上、今更引き返す事は出来ません』

『……相変わらず融通の利かねえ奴だな』

『貴方も、口は悪いけど優しい所は変わりませんね？蒼刃？』

『口が悪いは余計だ』

……なんか、この二人つて長年連れ添つた夫婦みたい雰囲気だな。今みたいなやり取りを夫婦漫才って言うのか？

まあ、そんな事は兎も角。この二人は一体なにで、俺達は一体何に巻き込まれたんだ？

『……さて、あまり時間もないし。さつさと引継ぎを終わらせるか』

『ええ』

「引継ぎ？ てか、アンタ等は一体なんだ？！」

『俺達は只の狩人だ。世界に溢れた影を狩るな』

「影つて一体なんですか？！」

『虚無の彼方から来る魔物。世界を蝕む者達です』

「そんな訳の分からぬものを狩れってのか？！」

『お前の言いたい事は分かるが、選ばれた以上覆す事は出来ないんだ。……わりいな』

『本当なら私達も、貴方達の様な子供にこんな事を背負わせたくない。……でも、影は待つてくれないの』

「ちょっと待つて下さい！ 少しは私達に考える時間を……」

『……ごめんなさい』

『それじゃ始めるぞ！』

何がなんだか分からぬまま、彼等が言つ引継ぎが始まった。

一体何が起ころのかと身構えると、俺の足元からは蒼い光が、なのはの足元からは白い光が立ち上る。

光が立ち上った時の衝撃で、俺はなのはの手を離してしまつが……傍にアイツが居るのは感じる事が出来た。

この光の中、一体なにが始まるのかと思つていたら

「……えつ？」

台座の上に在つた長剣が突如出現し……俺の胸を貫いた。

此処が夢の中だから分からぬけど、不思議と貫かれた痛みはない。

ただ、痛みが無い代わりに異物が入つて来る様な違和感がする。俺は剣を抜く事も出来ず、ただこの違和感が消えてくれるのをジッと待つ事しか出来なかつた。

第一話 受け継ぐ者（後書き）

初めてましてベヘモスと言つ者です。

本当は自分、此処で別の小説も書いているんですが、何故かなの
はネタが思い付いてしまい、七割見切り発車で連載する事にしました。

どちらの小説を優先して書くかは決めてませんが、更新速度は極端
に速かつたり遅かつたりすると思います。

この辺りの匙加減は、自分の気分次第なので何とも言えません。

今後の展開ですが、一人は力を渡され？影？と戦つて行く事に為り
ますが……原作キャラの出番は殆ど有りません。

ジユエルシードの事件もオリキャラが解決する事になりまし、原作
の名場面にも触れないと思います。

引き返すなら今の内だと思いますが……それでも続きを読むたいと
思つた方は、作者が失踪しない事を祈つていて下さい。

失踪しない限りは、頑張つて書いて行きたいと思つてますので。

それでは、次回の更新をお楽しみに。

……小説のネタ被つてないと良いな。

キャラ紹介

【宗谷 武】

本作の主人公で、公立の海鳴小学校に通う三年生。幼馴染のなのはと一緒に居る為、クラスからは良く「夫婦」と呼ばれている。

コレに関して本人は「まあ、言わせとけば良いんじゃないか?」と、適当に聞き流している。

何時の頃からか、白い迷宮を彷徨う夢を見ているが、只の夢である以上、話のネタにしか為らないと思つてゐる為、この事は親には話していらない。

身体を動かす事全般が好きで、体育の授業が一番の楽しみ。だが、他の教科は良くも悪くも平均的。

本人は多少目がいい程度にしか認識していないが、動体視力はかなり良く。

高速道路を猛スピードで走る車のナンバーが分かる程である。だと言うのに本人は「団体競技の時に、全体の動きが把握出来るから便利」くらいしか思っていない。

容姿は黒髪で、少し黒味がかつた青い瞳を持つ。

ファッション等には特に興味が無いが、あまり派手な格好は嫌つている。

【高町 なのは】

本作のヒロインで、武と同じ海鳴小学校に通っている。

生まれた日が一緒に、家がお向かいと言つ事もあって、両親が忙しい時は宗谷家に預けられていた。

その所為か、宗谷夫妻の事を実の両親以上に自分の親だと思つている節がある。

士郎が入院していた時も宗谷家に預けられていたので、特に寂しさを感じていなかつた。

今は武と同じ学校に通つてゐるが、本当なら私立の学校に通つ予定だつた。

だが、いざ入学となつた時に武とは別の学校に通つことが分かり、なのはがその学校の前で大泣き。

その後、なのはに泣き付かれた宗谷夫妻が高町夫妻を説得し、武と同じ学校に編入したと言つ経緯がある。

学校では、周りから「夫婦」と呼ばれるくらいに武と仲が良く、本人も昔交わした「大きくなつたら結婚しよう」と言つ約束を今も信じている。

その為、武が他の女子と仲良く話していると途端に機嫌が悪くなるが、手を繋いだり、頭を撫でてやると直ぐに機嫌が治る。

小さい頃から武と遊んでいた為、運動神経は平均的。
他の教科はどれも優秀で、特に算数が得意科目。

容姿に関しては原作と大差ないが、友人関係は大きく違う。
兄である恭也の恋人の忍の関係で、すずかとは顔見知りでアリサとも面識があるが、二人の事は「兄の恋人の妹と、その友人」程度の認識しかない。

キャラ紹介（後書き）

皆さんの感想と評価が作者のやる気の源。

第一話 蒼い刃

「う、うわあああ…………って、あれ？」

草原で蒼い剣に胸を貫かれる夢を見ていた俺は、その夢から追い出される様に飛び起きた。

頭ではアレは夢だと自覚してるけど、身体の中に異物が入つてくる感覺は今も残つていて。

この妙な不快感がなんなのか分からぬけど、俺の身体の中に何かが在る……そんな気がして為らなかつた。

「……そつだ、なのは！」

あの夢に俺だけではなく、なのはも一緒に居た事を思い出した。蒼い光に包まれた後、アイツが如何なつたのか分からぬ。

俺はなのはの無事を確認する為、アイツの部屋へと向かつた。

「おい、なのは！ 起きてるか！」

アイツの部屋に着いた俺は、ノックもせず行き成り中に入った。部屋に居るのはは一応起きてはいたが、何をする訳でもなく上半身を起こしてボーッとしていた。

入つて来た俺に反応せず、布団の中で呆けているところを見ると、あの夢で何か遭つたんじやないかと心配に為る。

……まあ、只単にまだ寝惚けているって可能性もあるけどな。

「……なのは？」

「…たけるくん?」

漸く俺の声に反応したのははは、布団から出で一疋散に駆け寄つて來た。

直ぐ傍にまで來たのかと思つたら、如何言ひつもりか知らないが俺の身體をペタペタ触つて來た。

何を考えているのか分からぬけど、物凄く心配してゐるのは顔を見ると、文句を言えそうに無かつた。

「え~っと…なのは?」

「…良かった。武君、ちゃんと生きている」

「あ、朝っぱらから縁起もない事を言つたな」

「だつて、夢の中の武君は剣に胸を貫かれちゃつてたんだもん。心配にもなるよ」

「……やつぱり、なのはもあの夢を見たのか」

「なのははもつて……もしかして、武君も?」

「ああ

如何やら俺となのはは、全く同じ夢を見たよつた。

なんで同じ夢を見たのか分からぬけど、俺もなのはもアレが夢とは如何しても思えなかつた。

…アレをただの夢とするには、この胸にある違和感が拭い切れないからだ。

如何にもすつきりしないまま、学校に登校した俺となのはは。何時もの様に授業を受けてくるものの、やつぱりあの夢の事を考え

てしまつ。

あの夢は一体なんだつたのか？俺の胸に残つてゐる違和感の正体は？夢の中の奴が言つてゐた？影？とはなんなんだ？

……気が付くと俺は、先生の話も聞かずそんなん事ばかりを考えてしまつ。

頭を切り替えて、眞面目に授業を受けよつとするけど……如何してもこれ等の事が頭から離れてくれなかつた。

「……はあ」

「如何したの武君。何か悩み事？」

「あの夢の事で悩んでんの。……お前は気に為らぬのか？」「そりや氣には為るけど……幾ら考へても分からぬから」「まあ、そなうなんだけどな」

なのはの言ひ通り、幾ら考へても分からんモノは分からん。そう割り切つて忘れるのが一番なんだけど、如何も頭から離れてくれないんだよ。

お陰で今日の授業の殆どをノートに取れてない。……後でなのはに見せて貰おう。

「お～お～。相変わらず、あの夫婦は仲がいいな」

「そんなんの何時もの事じやねえか。それよりも聞いたか？昨日の夜に動物病院付近で事件があつたつて」

「アレは事件じゃなくて事故だつて聞いたけど？」

「どつちでも同じだろ？」

「……絶対に違うつて」

動物病院で事故ねえ……。

そう言つう情報を何処で聞いてくるのか知らないけど、物騒な事には変わりないか。

とつあえず、そつ言つ事故はウチの近所で起こらないで欲しいもんだ。

あの家に住めなくなると、祖父ちゃんの家に引っ越す事になつそうで恐いんだよ。

結局、まともに授業を受けられず放課後になつてしまつた。

なのはの奴はちゃんとノートを取つてゐるみたいだし、後で見せて貰えれば問題はないだらう。

今はさつと掃除を終わらせて早く帰りたいもんだ。

「貰つた！」

「なんの！」

「左藤に鈴井！ テメエ等、幕でチャンバラしてないで真面目に掃除しろ！！」

「ええ～」「

「文句を言つたな！！」

はあ。如何して俺の班の連中は掃除に不眞面目な奴ばかりなんだ。眞面目に掃除してるのが俺と女子の伊藤さん位なもんだ。もう一人の女子の……柏山さんは今何処に居るのか分からん。教室には居たから、掃除が終わつた頃にひょっこり顔を出すに違いない。

……「イツ等、一遍泣かした方がが良いんじゃないだらうか？」

「あ、あの宗谷君。私達一人だけでも頑張ろう？」

「伊藤さん。……そうだな。役立たず構つてゐる時間も勿体無いし

「誰が役立たずだ！」

「テメエ等の事だ！！」

「「俺／僕をコイツと一緒にするな！！……ん？」」

「……掃除しようよ」

馬鹿一人を放置して、俺と伊藤さんは掃除を再開する事にした。途中であの二人が行方不明になつたりもしたが、特に気にせず掃除に専念した。

寧ろ、居ない方が静かで掃除に専念出来た。

掃除も大体が終わり、後はゴミ捨てだけとなつた。

俺達がゴミを捨てに行こうとした時、丁度柏山さんが戻つて來た。今まで何処に居たのか気になるが、あの馬鹿一人も捜しに行かないといけなかつたし、タイミングが良いと言えば良いのかもしない。俺は半ば強引に柏山さんにゴミ箱を押し付け、あの二人を探しに行く事にした。

流石に放課後の校内には殆ど人が居らず、辺りは静まり返つていた。ウチの学校はそんなに大きくないし、割りとすぐに一人を見つけられるだろう。

そう考え、俺はあの二人が居そうな場所を風漬しに探し始めた。

一階では見付からず、二階も捜しに行つたがコツチも空振り。

残っているのは体育館かグラウンドだけだが……まさか、先に帰つたりしないだろうな？

あの二人は、前々から掃除をサボつていたから、先に帰つても不思

議じやない。

……「レで体育館に居なかつたら、素直に掃除をサボつて逃走したつて先生に報告しよつ。

心の中でそう決意した俺は、まだ搜していない体育館に足を踏み入れた。

「お~い、左藤に鈴井。居るなら返事……ろ……」

体育館に入った俺は、目の前の光景に目を疑つた。

何処から侵入したんか分からぬが、黒い影の様な大型犬が床を食べていた。

……いや、食べると言つよりも床を黒く塗りつぶしている感じか。あの犬に黒く塗りつぶされて箇所と、無事な箇所とで境界線の様なものが出来てる。

アレが何をしてるのか分からぬけど、少なくとも俺の手に負える相手じやない。

此処は一旦戻つて、誰が先生を呼んできた方がいい。

そう判断した俺は、あの犬を刺激しない様にゆっくりと後退し始めた。

俺がゆっくりと後退し始めると、犬が急に顔を上げて「コツチを見てきた。

特に物音は立ててないのになんで気が付かれたんだ? ……いや、今は犬を刺激しない方が大事か。

俺は犬を刺激しない様に立ち止まり、アレがこっちに興味をなくすのを待つ事にした。

「ツ?!

犬がコツチをジッと観察してるかと思ったら、突如大きな遠吠えを挙げた。

余りの声の「テカさ」に驚き、耳を塞ぐと……犬が俺に向かって飛び掛かつて来る。

咄嗟の判断で左側に避けたけど、犬は体育館の出入口と激突した。

それで気絶してくれれば良かつたんだけど、あらう事が犬は扉を喰らい、黒く塗り潰してしまった。

「…マジかよ」

5、6mの距離を跳んで来たのも驚きだけど、あの扉の前に張り付かれたのは痛いな。

この扉はこの体育館と校舎を結ぶ唯一の扉で、あそこ以外に校舎に戻る手段がない。

一応左右にも外に通じる扉はあるけど、普段は鍵が掛かっていて開かない。

壁に取り付けてある梯子を上れば窓があるけど、あんな高さから飛び降りたら無事じゃ済まない。

外から助けが来るのは思えないし、此処はなんとかあの犬を退かして外に出るしかないか。

「問題はアレが如何動くかだな」

犬の動きは目で追えるけど、如何動くまでは予測出来ないからな。さつきのジャンプ力を考えると、10m離れていても飛びかかって来そうだ。

助走無しに10mって、なにもんだよこの犬。

「…………」

「うう。向こうはやる気みたいだ」

扉を粗方塗り潰した犬は、再び俺に狙いを付けて来た。
俺は何時でも動けるようにすると、犬は前脚を振り上げ爪で切り掛けってきた。

俺は脚を振り上げた時点で後ろに跳んで回避したが、床は爪が当たつた部分が黒くなっていた。

どうやら、あの犬に触れた部分は問答無用で黒くなるみたいだ。

「本当になんなんだよ、この犬？！」

俺は犬の爪や突進をなんとか回避する。

一瞬でも動きが遅れれば終わりだが、今の所なんとか避けている。
犬が何度も目の突進を繰り出すと、丁度良く扉の前から移動してくれた。

それを見た俺は、犬に目もくれず扉に近付こうとしたが

、

「なッ？！」

どう言う訳か、俺は扉の隣りの無事な部分に激突した。

俺は確かに扉に向かった筈なんだけど、如何言う事だ？

腑に落ちない俺は、もう一度扉に触れようと試みた。

扉に触れようとした手が境界線に入ると、行き成り消えて隣りの無事な箇所に出現した。

空間を飛び越えた……って言えば良いのかな？ 本当にそんな感じで手が飛び越えたんだ。

此処まで来ると夢か何かだと思いたいが、後ろに居る犬の唸り声が現実だと教えてくれる。

俺は直ぐに手を戻し、今度は全身が境界線を越える様にジャンプした。

俺が境界線を越えるのとほぼ同時に、犬がまた突進して襲いかつて來た。

なんとかギリギリの所で線を越えたから助かつたけど、こんな事何時までも続けられないぞ。

逃げる手段もなく、ひたすら謎の犬と追いかけっこなんて考えたくない。

俺の体力も無限じゃないんだし、何時かは体力切れで犬に食われちまう。

この状況をなんとか出来ればいいんだけど……それが出来ないから困ってるんだよな。

「 ッ――！」

「 また來た！？」

息つく暇も無く、犬は再び突進を繰り出してきた。

俺は直ぐに横に飛び、突進を回避しようとするが、周りは既に境界線だけで逃げ場が無かつた。

それでも逃げ場が無いか捜していると、犬は俺の直ぐ目の前にまで迫つて來た。

この距離じゃどんなに頑張つても腕や足は持つていかれる。

仮に避けれてとしても、コレ以上動き回れるスペースがない。……
此処までか。

『能力継承……完了。？蒼刃？起動』

「 ぬわあッ？！」

突然頭の中では声が聞こえたと思ったら、足元から蒼い光が立ち上つ

た。

直ぐ其処まで迫っていた犬は、立ち上った光にぶつかり壁際まで吹き飛ばされる。

蒼い光に包み込まれた俺の目の前には、夢で見たあの長剣と同じモノが浮んでいた。

なんでこの剣があるのか分からぬけど、俺は自然とこの剣に手を伸ばした。

俺が剣を握ると、服装があの夢に出て来た男を同じになり、包み込んでいた光も消滅した。

「…………」

犬は突然の出来事に警戒しているのか、いきなり襲つてくる事は無かつた。

俺としても訳が分からぬ事だらけだが、此処から出る為には、あの犬を倒さないといけない事だけは理解出来た。

俺は剣を握り締め、呼吸を整えてから……静かに剣を構えた。

この動作に反応したのか、犬は姿勢を低くして何時でも飛び掛かる様な体勢になる。

俺と犬の距離は大体10m。アイツなら一気に詰められる距離か。コツチから攻め様にも不安要素は幾つかあるな。……ならアイツに喰われる前に斬り捨てるだけだ。

「…………」

俺と犬はお互にその場から動かず、タイミングを見計らつていた。少しの間、其処でジツとしている

「…………」

溜めていた力を爆発させた様に、一気に飛びかかつて来た。今度の突進は今までの中で一番早く、俺との距離を一瞬にして縮めて来る。

それでも俺は慌てず、ただ剣を上に振り被り犬を見据え 、

「ツー！」

躊躇わずに一気に剣を振り下ろした。

剣を振り下ろした時に、何かを斬つた様な感じはしなかつたが……

犬は確かに斬り裂いた。

斬り裂かれた犬は消滅して行き、黒く塗り潰されていた部分は元に戻った。

体育館が元に戻ったのは良いけど、色々と謎が増えた気がするな。やれやれ、俺の人生は如何なつてしまふのやら……。

第二話 黒い猿

謎の犬の影を撃退した俺は、ヨロヨロに為りながら教室に戻った。あの剣は犬が消滅した後、唐突に消え去り、服装も元に戻っていた。本当にアレは一体なんなのか、謎ばかりが増えて行く気がするよ。

左藤と鈴井の二人は、結局先生が見つけてた。

あの二人、掃除をサボっている所を先生に見付かってたらしく、姿が見えない間は説教を受けていたらしい。

まあ、アイツ等はサボリの常習犯だからな。コレに懲りて眞面目に掃除して欲しいもんだ。

そんなこんなで、俺の班は他と比べて大分遅くなつたが、漸く今日の掃除が終了した。

……今日は色々な事が遭つたから、さつさと帰つて寝たい。

「あ、武君！」

「……よう」

荷物を纏めて玄関に行くと、何時もの様になのはが俺の事を待つていた。

なのはとは同じクラスだけど、ウチの班は何時も遅いから如何しても待たせちまう。

「待てないなら先に帰つても良いぞ」……とは言つてゐけど、先に帰つた試しがない。

あんまり待たせるのも心苦しいんだけどな……。

「何時も遅くなつて悪いな」

「うんん。私が好きで待ってるんだもん。気にしてないよ
「…そつか。ありがとな」

「にやはは。別にお礼なんて良いよ」

「俺が言いたい気分だつたんだよ」

「コイツと話していると、さつきまで戦っていたのが嘘の様だな。
寧ろ、アレが夢や幻の類だつたらどれだけ良いか……。

現実逃避なのは分かつてゐるけど、そう思えちまうんだよな……。

「はあ」……」

「如何したの武君？ 疲れてるみたいだけど」

「色々と遭つてね。現実逃避をしたくなつただけだ」

「ほ、本当に何が遭つたの？」

「……なんて説明すれば良いか分からん」

影の様な犬に襲われて、夢に出て来た剣で撃退した……なんて言え
ないよな。

流石にこんな事は「レつきりにして欲しいけど、如何なる事やら。
……せめて、なのはを巻き込まない様にしたいもんだな。

あの犬に襲われてから、大体五日くらいが経つた。
その間に再び襲われるといった事はなく、平穀無事な毎日を送れて
いる。

今日は日曜で学校が休みだから、なのはを連れて散歩に出でている。
今日は雲一つ無い晴天で、時折吹く風が心地いい。
やつぱりこんな日は家に籠もつてないで、外に出ないと勿体無いよ

な。

「いい天気だね、武君」

「そうだな。こんな日はノンビリ散歩するのが一番だな」

「……偶に思うんだけど、武君つてお年寄りみたいな楽しみ方するよね」

「俺の祖父ちゃんを見る限りだと、そんな事はないと思うが?」

「武君のお爺ちゃんを一般の人と比べちゃいけないと思つの」

「……さり気無く酷い事を言つな」

特に行く当ても無い俺達は、何処に行く訳でもなく、適当に海鳴市を散歩している。

とは言つても、市の中心部は人が多いし五月蠅いから、なるべく人の少ない場所を歩いてるけどな。

今も人通りの少ない土手を一人で歩いてるくらいだ。別に人ごみが嫌いって訳じゃないけど、いつも通り時くらいは静かなほうが良い。

「あ、見て武君。川岸の広場でサッカーの試合してるの」

「ん? どれどれ……」

なのはが指差した方では、確かにサッカーの試合が行われていた。戦つてるのは「丘山FC」と……「翠屋FC」?

「おい、なのは。あそこで戦つてるので、お前の父ちゃんのチームだぞ」

「へえ、そなんだ」

「反応薄いな……」

「だつて、如何でも良いし」

……士郎さん、貴方の娘はこんな風に育つてしましました。
いや、幾らなんでも興味ないは酷いだろ。少しひらには興味をもつてやれよ。

なんだ？ 今のは反抗期か何かなのか？

「ほら、武君。早く行こ！」
「別に急ぐ目的がある訳でもないし、慌てる必要は無いだろ」
「……お父さんに会いたくないの」
「あ～、最近家に帰つて無いから顔を合わせ辛いこと」
「うん」

確かに、連絡を入れているとは言え、一週間も自宅に帰つてないんじゃ会い難いか。

お向かいなんだし、もうひょっとまめに帰つても良いと思つんだがな。

……まあ、それはそれとして。俺も士郎さんの説教は聞きたくないし、此処はさっさと退散する하겠습니다。

「それじゃ行くか」
「うん！」

俺はなのは手を取つて、早足でこの場を後にした。
その時、一匹のイタチ……「うしき」動物が俺達の事見てるのが目に入った。

まあ、動物が人の事を観察するのは良くあるし、一々気にしても仕方が無いけどな。

土手を離れた俺達は、町中を彼方此方歩き続け……気が付いたら、海鳴神社に辿り着いていた。

なんで神社に来たのかは分からぬけど、特に宛も無く歩いていたからな。

多分、歩いている途中で変な道にでも入つたんだろう。

「武君、お参りでもするの？」

「それは別に良いだろ。……でも、歩き続けて疲れたから、ちょっと休ませて貰おう」

「本当に歩きつぱなしだったもんね」

俺となのはは、鳥居の下の階段に邪魔に為らない様に座り込んだ。今日の神社は休日にも関わらず、人の姿はなく閑散としている。まあ、休日と言つても今は四月。お参りする季節としては少々時期外れだな。

「……神社は静かだな」

「少し寂しい気もするけど、ノンビリするには一度良いのかもな」

「やつぱり、お爺ちゃんみたいだよ武君」

「なら、俺に付き合つお前はお婆ちゃんだな」

「……武君と一緒になら、それでも良いかも」

「良いんかい」

特にする事も無く、なのはとこいつしてノンビリする老後か。……うん、良いかもしねないな。

まあ、そんな先まで一緒に居られるのか分からぬけど、やつぱつのも悪くないな。

ただ贅沢を言つなら、その場面にお茶とお菓子が有れば完璧だったな。

……次になのはと散歩する時は持つて来るか。家で準備すれば良いだけ出し。

「 「…………」「

俺もなのはも特に喋る事無く、ただ此処から見える街並みを眺めている。

街が一望出来る訳じやないけど、この場所から見える景色は嫌いじゃない。

本当にお菓子とか持つて来れば良かつたな～って思つてると、風も吹いていないのに木々が突然ざわめき始めた。

俺は誰かが木を揺らしているのかと思い、後ろを振り返ると……神社の境内に黒い影が湧き出しているのが眼に入る。

「なにアレ……」

「ああな。ただ、あの夢で言つていた？影？つてアレの事らしいぞ」

なんでこんな時に出て来るのやら、少しば空氣読めよな。

心中では文句を言いつつも、なのはの手を引いて静かに傍にある森の中へ向かつた。

本当なら階段を降りれば良かつたんだけど、降りてる最中に襲われたら大変な事になる。

なら、障害物の多い森の中を通つて言つた方が多少は安全だ。

「良いか、なのは。絶対に俺の手を離すなよ」

「うん」

あの影の正体が一体なんのか気になるけど、今はなのはを守る事の方が大事だ。

境内で湧き出している影は、前みたいに犬の形にはなつてないけど、

何時襲い掛かってくるか分からぬ。

今は少しでも早く森の中に入つて、あの影から遠ざかないと……。

俺達は物音を立てない様に森の中に入ろうとするが、湧き出している影が次第に姿を現し始めた。

このままだと何時襲われるか分からぬ。そう感じた俺は、なのは手を引っ張り森の中に駆け込んだ。

森の中に駆け込むのとほぼ同時に、何かの鳴き声が聞こえて来た……。

何かの悪寒を感じた俺は、なのはを押し倒すようその場に倒れ込む。すると、俺達の居た場所を黒い影が飛び込み、正面にあつた木に張り付いた。

「……なんだありや？」

「黒い……お猿さん？」

一体何が木に張り付いたのかと思つたら、人間の大人くらいの大きさの影の様な猿だった。

前回は犬で、今回は猿。……影の姿形つてのは毎回違うのか？
まあ、その辺りは如何でも良いとして……よりによつて猿の形をした影か。

今回も犬だと思つて、障害物の多い森の中に入つたのに……これじや意味が無かつたかもな。

猿は縦横無尽に駆け回るイメージがあるから、周りにある木々も大して役に立たないな。

「……なのは、走れるか？」

「う、うん。大丈夫」

「そつか。……なら、絶対に立ち止まるなよ！」

俺は俺の手を取つて、街とは反対側の方に走り出した。

猿は直ぐに木々を伝い、俺達を追いかけ始める。

相変わらず、なんで追い掛けて来るのか分からぬけど、アイツに

掴まつたら碌な事に為らないのは分かる。

だから、絶対に逃げ切らぬと行けないんだけど……問題は俺とな

のはの体力が持つかだな。

第四話 終わる日常

謎の猿から逃げるために森の中に入つたが、やっぱり失敗だつたかもしれない。

周りに生えている木々は、俺達には邪魔だがアイツには格好の足場に為つている。

完全に出現する前に階段を降りれば良かつたのかもしないが、降りてる最中に後ろから襲われる方が危険だ。そう思ったからこそ森に入つたつてのに……。

「ハアハア……」

「大丈夫か、なのは」

「な、なんとか……」

追いかけて来る猿から逃げるために、俺達はずっと全速力で走り続けている。

俺はまだ大丈夫だが、なのははそろそろ辛いみたいだ。

あの猿は疲れを知らないのか、ずっと変わらない速度で追いかけて来る。

このままだと、追いつかれるのも時間の問題だな。

「ツ！……！」

「ツ？！　なのは、跳ぶぞ……！」

「え……キヤアツ？！」

右の方から飛びかかつて来た猿を、前に転がるようにしてなんとか避ける。

今のはなんとかなつたが、こんな無茶な避け方何時までも続けられ

るわけが無い。

早くこの猿から逃げ切りたいけど、疲れ知らずのコイツから逃げれる気がしないな……。

立ち向かおうにも、素手でこんな不得体の知れないと戦いたくないし。

……せめてあの時の剣が有れば、なのは一人を逃がす事が出来たかも知れないのに。いや、今は泣き言を言つてる場合じゃないか。

「なのは、走れるか?」

「い、ゴメン。ちょっと足が……」

そう言つてなのはは、足首の辺りを手で押さえる。

さつきの無理なジャンプで足を捻つたのか。時間も無かつたとは言え、もう少し考えれば良かつた。

俺はなのはを背負つて行こうと考へたが、再び猿が襲いかかつて来た。

咄嗟に俺はなのはを突き飛ばして猿を避けた。

猿が通り過ぎた場所は、問答無用で黒く塗り潰されている。

犬でも同じ様なことがあつたが、本当にコイツ等はなんなんだ?

「…………」

「い、いや……」

「なのは!?」

黒い猿は、足を挫いて動けないでいるなのはに狙いを付けた。

避ける為とは言え、なのはの手を離しちまつたのは不味かつたか……。

俺は近くに落ちてゐる物を手当たり次第に投げるが、境界の所為で

猿に当たらず、空間に越えてしまつ。

どれだけ投げても、空間を越える所為で猿に掠りもしない。

理屈は分からぬけれど、あの剣じやないと「トイツ等には攻撃を当てられない様だ。

このままじゃ、田の前でなのはがアイツに喰われちまつ。……そんなの絶対に嫌だ！！

「……狩人だか何か知らないが受け継いでやる。だから、俺に力を貸してくれ？ 蒼刃？！？」

俺がそう叫ぶと、足元から蒼い光が立ち上り蒼い長剣が出現した。ただ、剣の形状が日本刀の様な反りが入った片刃の長剣に変わっていた。

なんで形が変わっているのか気に為つたが、今はそんな事を気にしている場合じやない。

俺は迷わず剣の柄を握り、黒い猿に斬り掛かる。

真っ直ぐ振り下ろした剣は、あと少しと言つた所で避けられてしまつたが、ちゃんとあの猿に届いた。

……剣が届く事さえ分かれば十分だ。コレ以上なにかされる前に斬り捨てる！

「た、武君……」

「其処でジッとしているのは、直ぐに片を付ける」

俺は剣を肩で担ぐように持ち、猿との間合いを詰め……一気に剣を振り下ろした。

振り下ろした剣は、空間を飛び越える事無く振り下ろされるが、アイツは近場の木に登つて剣を避けやがった。

アイツが登つた木を切り倒せれば良いんだけど、そんな事をしたら倒れた木に押し潰されかねない。

それに、木を一本切つたところでの猿が降りて来るとは限らない。此処はアイツが降りてくるのを待つしかないな。

「.....」

俺は剣を寝かせ顔の右側に寄せ、左足を前に出して構える。

この構えのままその場から動かず、ジッと相手の出方を見る。姿こ見えないけど、木々が不自然に揺れている所からこの近くに居る事は分かっている。

問題なのは、何時どのタイミングで攻撃していくのかと言う事だ。

その場でジッとしていると、後ろから何かが飛んでくるのが分かった。

俺は直ぐに振り返り、飛んで来たものを斬り落とした。

今斬つたのは黒く塗り潰された木の枝だったが、それを立て続けに投げられる。

飛んでくる速度は大した事無いが、投げられる数が多い。

一度に何個も飛んで来ないが、休む間もなく飛んで来るのは少し辛い。

この眼のお陰で飛んでくるコースは読めるけど、集中力を切らせたら不味いな。

そんな事を考えながら木の枝を斬つていると、突然アイツの攻撃が止んだ。

次は何を投げて来るのか警戒していると、猿は黒い棒を持って俺の目の前に現わされた。

「.....観念して俺に斬られる気になつたのか？」

「一ツ！...！」

「何言つてゐるのか分からねえよ

俺が軽口を叩くと、猿は黒い棒を振り被つて襲いかかって来た。

剣術の真似事でもしてゐるのか、その黒い棒を真つ直ぐ俺に振り下ろ

して来る。

俺はその棒を斬り捨て、刃を反し猿に斬り掛かる。

斬り掛けりはしたが、持ち前の瞬発力で肩を掠める程度にしか斬れなかつた。

俺は間合いを離される前に踏み込み、胴から薙ぎ払おうとする。

だが、それも間に合わず、刃先でなぞる程度しか斬り込めなかつた。子供の身体だから仕方が無いのかも知れぬけど、やっぱりリーチが足りないか。

多分、祖父ちゃんなら最初の一太刀でコイツを斬り捨ててる。遊びに行く度に無理矢理に剣術を教えてくるけど、今度は眞面目に受けてみようかな。

「ま、それもこの場を生き残れたらの話かい。

俺はさつきと同じ構えを取つて、猿との間合いを計る。

アイツを斬り捨てるには、後一・二歩は踏み込まないといけないけど……させてくれる訳ないか。

それどころか、さつきの警戒してまた物を投げて来るかもしれない。

投げて来るだけだと、また倒し辛くなるから厄介だな……。

そんな風に考えていると、猿は意外にも俺に跳びかかって來た。てつくり俺は、離れた所からチマチマと投げて來るだけだと思つていたから、これには少し驚いた。

でも、自分から向かつて來てくれるなら、正面から迎え撃てば良いだけだ。

俺は直ぐに剣を振り下ろすが、猿は刃先数cm手前で急停止した。急停止した猿はまた直ぐに動き出し、俺の顔目掛けて飛びかかって

くる。

俺は咄嗟に剣から左手を離し身体を逸らす事で避けた。
そして右手に持った剣を思いつきり振り上げ、背中から猿に斬り掛かる。

だけど、この一撃も上手くかわされてしまった。

一進一退の攻防……なんて言えば格好が付くのか？

実際の所は、俺があの猿に振り回されている様なもんだ。
見た目以上に頭が良いのか、アイツに俺の間合いを見切られ始めて
いるのかも知れないな。

軽くかじった程度の素人同然の剣だ。見切られても不思議じゃない。
不思議じゃないが……なんか腹が立つ。

このままじゃ埒もあかないし、少しやり方を変えるかな。

俺は右足を引き身体を右斜めに向け、剣を右脇に取り剣先を後ろに
下げ片手で構える。

普通の剣だつたら重くて片手で持てないけど、この剣は不思議と重
さを感じない。

それにこの構えなら、俺の剣の長さを確り把握出来ない筈。
まだ間合いを見切られてない今の内に斬り捨てるしかない！

「 「…………」 」

俺は呼吸を整え、猿は飛び出すタイミングを見計らつている。

お互に動かないで居ると、辺りが茜色に染まり始めた。

遠くの方で何か大きな音が聞こえたのと同時に、猿は俺に向かって
飛び掛つて来た。

俺は直ぐに剣を振らずにタイミングを見計らつ。

直ぐに振るつても急停止されるのは分かっている。

なら、十分に間合いに入つた所で一気に薙ぎ払うだけだ。

奴が間合いに十分に入ったのを見て、俺は剣を振り始める。

俺の動きを見て猿は、すぐさま急停止しようとするが

「ハアアアアアアアアアアツ！」

右足で更に一步踏み込み、強引に間合いを詰めて斬り捨てた。斬られた猿は胴から一つに別れ、雄叫びを上げる事無く消滅していつた……。

猿を撃退した俺は、なのはを背負つて家に向かつていた。

劍はアイツを倒した後
自然と消えてしまったか……如何言へ原理な
のか分からん。

「足、大丈夫か？」

「うん。平氣」

「そつか」

なのはは平氣だと申すナビ、俺達は医者じやないからな。帰つたら

一度医者に診せた方が良いかもな。

それにしても、さつきからなのはに元気が無いような気がする。

「ねえ、武君。剣を出す時に「受け継ぐ」って言つてたけど……」

アレ、本気なの?』

「宣言しちまつたからな、受け継ぐしかないだろ。……とりあえず、

今度の夏休みに祖父ちゃん家に泊まり込んで鍛えてもうつかな
「あんな化け物と戦うなんて無茶だよ……」

「そもそもな

「あんなのは警察とか軍隊に任せよ。何も武君が戦う必要なん
て……」

「軍隊でも攻撃の通らない相手は辛いだ。それにこうなった以上、
もう引き返せないだろ？」「

「……」

……いや、引き返せなくなつたのは今日じゃない。

あの日、夢の中の草原で力を受け継いでから、俺には引き返す道な
んてなかつたんだと思う。

なんで俺が選ばれたの分からぬいが、こうなつた以上は前に進みし
かない。

……でも、出来る事なら何事も無く生きて行きたい。
無理な願いなのかも知れないけど、そう簡単に割り切れる訳無いだ
ろ。

「あ、そうだなのは。今日は自分ん家に帰れよ

「えつ？！ なんで！？」

「なんでつて……偶には帰らないと小父さん達も心配するだら」

「それは……そうかも知れないけど」

「分かってるならそうしろって」

「……なら、今日は家に泊まって行つてよ」

「俺がなのはん家に？」

「うん

「別に良いけど……許可降りるか？」

「大丈夫。なんとかするの」

「……まあ良いけどな」

急になのはの家に泊まる事が決まつたが、本当に大丈夫なんだろうか？

確かに何時も泊めてるから、偶には逆でつて言つのも悪くないんだけどな。

その後も適当な話をしながら家に向かつて歩くけど、ずっとなのはの表情が晴れないのが気になつた。

オマケ

武君は影と戦う事を決めた。

こんなに危ない目に遭つたのに、如何して戦おうとするの？

あんなのは警察とか軍隊とかに任せとけ、私達は私達の生活を送るべきだと思ひ。

態々危険な目に立ち向かうなんて絶対に変だよ。

それに、戦っていてもし死んじゃつたら如何するの？

武君が死んじゃつたら、悲しむ人が居る事をちゃんと分かってるの？
……うんん、武君の事だ。きっと分かつた上で受け継ぐって決めた
んだ。

そう思えるからこそ、尚更私には理解なんて出来ない。

私はこの日常が好き。

武君が居て、小父さんや小母さんが居て、お母さん達が居るこの日常が。
常が。

辛い事や嫌な事もあるけど、それでも嬉しくて楽しい毎日が大好き。
……だから、それを捨てるなんて事考えたくない。

如何して私達にこんな力が渡されちゃつたんだ？

こんなもの欲しくもなかつたし、誰かに渡せるのなら直ぐに渡したい。

……そんな事出来ない位分かってる。でも、こんなモノ欲しくなかつたよ……。

第五話 なのはの話 (漫畫)

お読み。

夕方に一度最新話を作成したのですが、少々思いの外の誤りがあり一度削除し、もう一度書き直してきました。

前に上げたのを読んでくれた方には申し訳ありませんが、こいつが本当の第五話になります。

第五話 なのはの悩み

影を狩る事を決めた俺は、次の日から鍛練を始める事にした。始めると言つても、何をすれば良いのか分からぬから、まずは祖父ちゃんに相談する事に。

俺の祖父ちゃんは、家に遊びに行くたびに剣の稽古を付けて来るちよつと困つた人だ。

でも、剣の腕は超一流……らしく、本人曰く「ワシに掛かれば、木刀で金剛石が斬れる！！」との事。

実際に斬つたところを見た訳じやないけど、相談するには丁度良い相手だ。

【祖父ちゃん。剣の稽古つて何をすればいいんだ？】

【ふむ……。とりあえず、念入りに柔軟をした後町内を走り、その後に素振り千回すれば良いじゃろ】

【せ、千回？！】

【うむ。もつとも、極める気があるのならワシの家に住み込むべきじゃがな】

【いや、俺も学校があるから無理だよ】

【んなもん、コツチの学校に転校すれば良いだけじゃろ。寧ろそつせい】

【そんな無茶な】

無理矢理に転校させよつしてきたが、なんとかはぐらかす事が出来た。

ちよつとだけ、泊り込みで修行するのも良いかも……とか考えてしまったのは内緒だ。

電話の最後に祖父ちゃんは、「一応、不破の奴にも相談しておけ」

つて言つてきた。

俺も鍛練する場所として、高町家の道場を借りようと思つていたから頷いておいた。

……それにしても、なんでなのはの父ちゃんの事を不破つて呼ぶんだ？

そんなこんなで、修行を始めて一週間近くが経つた。

最初の内は木刀の振り過ぎで、まともに腕が上がらなかつたけど、最近は少しずつ慣れてきた。

人間の為れと言うものは恐ろしいね。……いや、本当に。

初日はあまりの辛さに投げ出したくなつたけど、今はそんな事も無くなり無心で振れる様になつた……と言つた、素振りの時は何か考えていると辛くなるから考えない様にした。

鍛練を始めてから、時間が過ぎて行くのが早くなつた様に感じる。ちょっと前に始めたと思つたのに、気が付けばもう一週間も経つていた。

世間では「ゴールデンウイークに入ったとかで、テレビでも観光地の特集なんかしてる。

まあ、俺にはそんな事関係ないんだけどね。

影と戦うにはもつと強くならないといけないんだ。観光なんかしてる暇ないっての。

なのはン家は温泉に行くらしいが、ウチはそんな予定もないし、一人寂しく素振りするか……って思つていたのに……。

「……如何してこうなつた？」

「…？ 一体何が？」

「「」の状況がだ」

なのは達が泊まりで温泉に行くつて聞いたから、今日と明日は自宅の庭で素振りしようつて思つていたのに、なんで俺は高町家の車に乗つているんだ？

確か今朝は、朝早くから町内を一周して、ウチに帰つて来たら何故か母ちゃんが外で待つていて、無理矢理車に乗せられたんだよな。つまり犯人は母ちゃんか！ 序でに言つと高町家の策略か

…

マジでなんでこうなつたんだ？ 俺の知らないところでどんな話があつたんだよ。

「ははは、スマナイね武君。こんな方法で連れて来ちゃつて」「小父さん。そう思つうなら最初から話して下さいよ」

「いや、こうでもしないと来ないんじやないかと思つてね」

「其処まで人付き合い悪くないですよ、俺

「そりだつたかい？」

「…多分」

付き合いには悪くない方だと思つけど、イマイチ自信がないな。此処最近はずっと鍛練ばかりしてたし、そう思われても仕方が無いのか。

だからつて、無理矢理に乗せる必要は無いだろ。母ちゃんは一体何を考えているんだ？

「まあまあ。折角来たんだし楽しまないと損だよ、武君」

「……それもそうだな」

なのはの言つ通り、折角来たんだし楽しまないとな。

それに、今から帰らうにもタクシーを拾う金なんて持つて来てないつての。

車に揺られる事だいたい三十分くらいか。やつと目的地の温泉宿が見えてきた。

この宿は海鳴市の郊外にあるから、高町家は昔から利用しているとか。

ちなみに俺は、此処に泊まるのは初めてだつたりする。

なにせウチの母ちゃんは、「旅行に行くなら遠出しよう」って考えの人だから、近場の温泉宿を利用した事がない。だから、此処に宿があるのも初めて知つたくらいだ。

なのはとは普段から一緒だけど、流石に家族旅行について行こうとは思わないっての。

「それにしても、やつぱり和室は落ち着くな～…………」

「武君、ちょっと良いかい？」

「なんですか？」

「少しだけ話があるから付き合つてくれないか

「別に良いですけど…………」

「ありがとう。それじゃ早速行こう

宿に着いたばかりだけど、俺は小父さんの後について行く事に。走っていたから汗も搔いてるし、やつと温泉に入りたかったけど

……仕方が無いか。

そんな事を考えつつ、小父さんと逸れない様に後を追いかけた。

俺と小父さんは、宿を出で近くにある遊歩道にやつて來た。遊歩道には人影が無く、この辺り一帯が静まり返つていた。こんな所まで連れてきて、一体なんの用なのや。他愛のない話しなら宿の部屋でも出来ると思つた。

「それで小父さん。話つてなんですか？」

「……武君。最近のなのはを如何思つ？」

「最近の……ですか？」

「嗚呼

「…………元気な様で元気がない。いや、アレは何か悩んでるのか

「やつぱり、君にもそう見えるか」

そんな風に感じじるよつたのは何時からだつたかな？

……確かに、俺が狩人になるつて決めた次の日からだつたけか。

なのはの奴、表面上は普段と変わらない様に見えるけど、付き合いの長い俺からすれば悩んでいるのが直ぐに分かつた。

何か悩んでるなら相談に乗るつて言つたけど、「なんでもない」つて言われちまつたんだよな。

アイツ、結構頭が固いから一度そう言つと中々教えてくれないんだよ。……とは言つても、アイツが何を悩んでいるのか察しは付くけど。

「もしかして、話つて言つのはなのはの事ですか」

「嗚呼。……あの子があんなにも思い詰めているのは初めてだからね「すみませんが、俺も何に悩んでいるのかは知りません」

「そうか……」

「でも、なんとなく察しは付いてます」

「ツ！ それは本当か武君！？」

「ええ……と言つか、きつと俺が原因でしょつか」

「……？ それは如何言つ事だ？」

「あ～……何処から話せば良いのかな？」

正直に話すとしても、実物を見ない限りは夢物語の様なもんだしな。だからと云つて、影の事や力の事を話さないで説明するなんて無理だし……本当に如何しよう?

……色々と考えた結果、俺は小父さんに今の状況を説明する事にした。

説明してとしても信じて貰えるか分からぬけど、はぐらかして説明する方法が思いつかなかつた。

「…………と云うのが今俺が置かれている状況です」

「…………にわかに信じられない話だな」

「でも、嘘じやないです」

「そうだろうね。……嘘を付くにしても、君の眼は真つ直ぐすぎる」

「…………多分なのはは、俺が継ぐ事を決めたのに悩んでいるんだと思います」

「あの子にも同じ力が宿つたからか？」

「其処までは分かりません。けど、俺が継ぐと決めた事が関係しているのは間違いないかと」

「…………そつか」

アイツが悩み始めたのは、あの猿を倒したときの帰り道の辺りからだ。

何を悩んでいるのか分からぬけど、あの時に俺を考え直すよう言つてたから多分そうだろう。

……俺だって、受け継ぎたくて受け継ぐ訳じやない。ただ、そうし

ないと守れなかつたから。

その場限りの嘘にすれば良かつたのかも知れないけど、アイツ等は何時かまた襲つて来る。

そうなつたら、俺はきっとアイツ等に立ち向かう。……そんな風に為つて来ると、継ぐ継がないとか関係なくなるだろ。

「…武君。君は継ぐ事を決めて後悔はしないのかい？」

「それは分かりませんけど……戦わないと守れない事を知りましたから」

「……君くらい歳でそれを知るなんてね」

「出来る事なら、まだ知りたくなかったですけどね」

自分でもアコトソラ供らしくないと今は思ひナビ、もつ後に引け返せないからな。

俺は溜息を一つ吐いて、なんとなく空を見上げた。
空にはまばらに雲が浮んでいて、気ままに漂っているのが少し羨ましく思えた。

なのはS·i·d·e

今日は久し振りの家族旅行なの。

今回は武君も一緒だけど、武君とは家族も同然だから特に関係はない。

……本当は一緒に温泉に入りたかったけど、お父さんが用事とかで武君を連れて行っちゃつた。

一体なんの用が分からぬけど、一人は仲も悪くないし、きっと変

な話じやない筈。

「…………」

「如何したのなのは。一人でボーッとして」

「あ、お姉ちゃん」

「何か悩みなら相談に乗るよ」

「…………うんん。何でもないから気にしないで」

「そう?…………あんまり思い詰めちゃ駄目だよ」

「だから、大丈夫だつて」

お姉ちゃんにはやつ言つたけど、本当は悩んでいるんだよね。
二週間前のある日。武君が影と戦う事を決めた時の事で……。
如何して武君は、あの影達と戦おうと思えるんだろう。私には不思議でしようがないの。

とても生き物とは思えない姿に、あの得体の知れない力。

通つたり触れただけで黒く塗り潰すなんて、普通の生き物に出来る事じゃない。

……それに、私に近寄つて来た時の影の眼。アレは本当に不気味だった。

なんて言つか……何か品定めするような感じの眼だった気がする。

武君はアレと正面から戦つたのに、恐いとか感じなかつたのかな?
私はただただ恐かつた。武君が傍に居てくれるのに、得体の知れない恐怖がずっと傍に居るような気がして本当に恐かつた……。

なのに、如何して武君はアレと戦えるんだろ?。あんなの、子供の手に負える相手じゃないよ。

……それに、このままだと武君が遠くに行っちゃうかもしれない。
私にはそっちの方が恐い。

私はこの日常がずっと続いてくれると思つてた。……でも、武君に取つては違うのかな？

私にとつて武君はとても大切な人。そんな人と離れ離れになるなんて耐えられない。……でも、あの影達と戦うなんて出来ない。

……ねえ、武君。私は一体如何すれば良いのかな？

「…………」

「ちょっととなのは、わたしの聞いてる？」

「…………え？」

「え？ つじやないよ。折角温泉に来たんだから、お風呂に行こうつて言つてるじゃない」

「あ、そうだね。行こう、お姉ちゃん」

「全くもつ。……本当に大丈夫？ お姉ちゃんが相談に乗るよ？」

「……じゃあ、恋の悩みの相談に乗つてくれるの？」

「それだけは勘弁して！！」

「なら、相談しない」

「待つてよ、なのは～」

……お姉ちゃんには悪いけど、この悩みは誰にも相談出来ないよ。そもそも、こんな悩みを誰に打ち明ければいいのか分からないの……。

私は普段通りにしながらも、心の中でお姉ちゃんに謝るしか出来なかつた。

なのはSide out

第六話 真夜中の戦い

「5」

「6なの」

「はい、7」

「「ダウト」」

「二人して言い切つた?！」

俺は今、なのはと美由紀さんの二人でダウトをしていく。時刻はすでに20:00を過ぎてるから、あまりホテルをうろつく訳にも行かない。

それにもうろつくとしても、行く場所なんてゲームコーナー位だ。小遣いもそんなに持つてないし、あんまり遊ぶ事は出来ないんだよな。

「お姉ちゃん。早くカードを回収して」

「せめて確認くらいしようよ!?」

「そんな事しなくても分かります。なので、早くして下さい」

「ぐぬぬぬ……。分かつたよ、回収すれば良いんでしょ回収すれば

!」

美由紀さんは不満気に床に置かれたカードを集めれる。

だけど、さつき出したカードが間違いなく7じゃない。

……何故なら、7のカードは全て俺の手元に来ているからだ。他の人が7を出せる訳がない。

ついでに言つと、なのはの6も怪しかつたんだが……手元に一枚しか無いから見逃した。

もしかしたら嘘を吐いてるかも知れないが、残りの一枚の行方が分

からない状態で、流石にダウトを叫ぶ訳には行かない。
このゲームは駆け引きが重要だから、考えすぎるのも如何かとは思うがな。

「それじゃ続きを。8

「9

「10ね

「11つと

「12

「武君、それダウトなの

「悪いななのは、外れだ

「ウソツ ? !

「本當だ。……ほれ

「……やられたの

そう言いながらも、なのはは床にあるカードを回収する。

こうして遊んでくると、あまりにも普段通りで、本当に嘘でいるのか分からなくなる。

だけど、時折ボーッとしている所を見ると、何か考えているのは間違いない。

なのはの奴、何か考え始めると周りが見えなくなるからな。
普段なら勉強以外でそうは為らないのに、それ以外の時にボーッとしてたら何か悩んでいるに違いない。

大した事でないのなら、俺か母ちゃんたちに相談してくるからな。

「続きを始めるよー 13ー」

「1だよ

「2

「3 !

「4だね

なのはの悩みは、あの日の事に関係しているのは間違いないと思つ
んだけど……一体なにで悩んでいるんだ？

俺が受け継ぐ事を決めた事か？ それとも、自分も力を持っている
事か？

……じけりにしほ、ソッチ関係なら俺に相談してくれても良いだろ
う。

信用されてない……って事はないだろけび、少し悲しい気もする
な。

「11」

「「武君、ダウトー」」

「残念、外れ」

「ウソでしょ？！」

「またやつちやつたの……」

俺に相談出来る事なら相談して欲しいが、ここまで何も言つてこな
いとなると望み薄だな。

そうなると、小母さんか母ぢやんに期待するしかないけど……コシ
チも微妙か。

全く、変に抱え込まないでもつと気楽に相談してくれれば良いのに。
……あ、気楽に相談出来ないから抱え込んでるのか。

時刻が22:00を過ぎた頃、俺達はゲームを止めて眠る事にした。
美由紀さんはまだ起きれるみたいだけど、最近早起きをしている俺
にはそろそろ辛い。

鍛練を始めてから早く起きる様にしてるから、その分寝る時間も早くなった。

まあ、遅くまで起きてする事なんてないし、別に良いんだけどね。

布団に入つて寝ていると、ふと変な音が聞こえて來た。

物音……とは違う、何かが這いする様な変な感じの音……。

その音はこの部屋ではなく、廊下から聞こえて來る。

誰かが布団に包まつて廊下を歩いている……って事はないだろうし、コレは一体なんの音だ？

無視して眠れれば良かつたんだけど、如何してもその音が気になつてしまつた。

俺は皆を起こさない様に布団から抜け出し、静かに部屋から廊下に覗き込んだ。

「……なんだこりゃ？」

廊下を見てみると、廊下全体が黒く塗り潰されていた。

この感じからして影が出現したのは間違いないけど、なにか前の時は違う様な気がした。

確かに黒く塗り潰されてるけど、その上からもう一度塗り潰されてる様に見える。

前に戦つた犬や猿の時にはこんな事は無かつたのに、今回は違うのか？

多少疑問に思つものの、このまま放置するわけにも行かない。

「…行くぞ、蒼刃」

刀を取り出した俺は、真っ黒に塗り潰された廊下に出ていった。

今回は前の時とは何かが違うし、気を引き締めていかないとな。

俺は深呼吸をして心を落ち着かせた後、影を捜す為に廊下を駆け出

した。

旅館の中は、俺達が泊まっていた階の廊下は全滅。

上の階は分からぬが、下の階も同じ様に黒く塗り潰されている。今が夜中だから良かつたけど、昼間にこんな事に為つてたら大変だつたな。

俺は平氣だが、普通の人ならどんなに頑張つても自分の部屋に辿り着けない。

いや、部屋に辿り着く前に影に襲われるほうが危険か。

……でも、アイツ等に襲われるど比うなるんだ？ ちょっと氣に為るな。

今分かつてゐる事は、黒く塗り潰された場所は他の場所との繋がりがなくなるつて事だ。

俺は蒼刃のお陰か、境界線を越えて動き回る事が出来るけど、他の人じや別の場所に弾き飛ばされる。それ以外の事は何も分かつてない。

……どうせ引き継がせるなら、アイツ等の事を教えてくれたつて良いだろ？

「意外と先代はケチだつたのかね？」

あの夢の中で一度会つたきりの人の愚痴を零してみる。

こんな事を言つて何かが分かる訳じやないけど、そう思えてしまう。先代が聞いてたら怒られそうだけど、気にしていても仕方が無い。俺は頭を切り替えて、引き継ぎ影の搜索を続けた。

旅館の中をアチコチ捲した俺は、一階のロビーにまでやつて來た。その間に影の姿を見つけられなかつたが、此處に來て漸く見つける事が出来た。

今回出現した影は……黒い蛇つて言えば良いのかな？

黒くて何処が頭なのか分からぬけど、手足はなく、胴体が異様に長いから多分そうだろ？

「……しかし、デカイな」

今まで出て來た影もそうだけど、今回の奴も通常の何倍もの大きさだ。

人どころか、ポーーくらーの大きさなら軽く飲み込めるんじやないのか？

……でも蛇つて、見た目以上に口が広がるから、下手すると牛も飲み込めるのか。

「まあ、そんな事気にして仕方が無いか。俺は俺の仕事をするだけだ」

俺は刀を構え、目の前に居る黒い蛇に斬り掛かつた。

素早く振り下ろしたが、蛇の動きはそれ以上に速く、俺の攻撃は軽々とかわされた。

俺は直ぐに追撃しようとしたが、それよりも速く蛇は自身の尻尾で迎撃してくる。

今の時刻が深夜で周りが黒く塗り潰されている所為か、真っ黒の奴の攻撃に反応出来ず、そのまま壁際に吹き飛ばされてしまう。

「……？！　い、今のは効いた……」

俺は奴の身体に触れた事で侵食されたかと思つたが、意外とそんな事はなかつた。

コレも蒼刃のお陰なのか分からないが、少なくともこの格好でなら奴等に触れられる事は分かつた。

……でも、さつきの攻撃はかなり痛かつた。正直、戻さなかつたのが不思議なくらいだ。

「…………」

蛇は追撃せずに俺の事をジックと観察してくるけど、何時攻撃されても良いように、黒い尻尾を左右に振り回していた。

周りが暗いから微かに見えないけど、間違いなく動かしてゐる。

迂闊に前に出て攻撃しようものなら、またあの尻尾で壁際まで吹き飛ばされるだけか。

だからと言つて、ここでジックとしていても仕方が無いんだが……何か良い手がないもんかな。

「この距離から攻撃出来れば良いんだけど、そんな事出来るわけ無いしな」

ゲームや漫画[じや]ないんだ、そんな事が気軽に出来たら恐いっての。仮に在つたとしても、俺みたいにな素人に出来るとは思えないがな。

「……さて、本当に如何しようかな？」

奴の身体は周りの色と同化してゐるけど、尻尾を振り回してゐる動作は見える。

もう少しあはつきっと見えれば、尻尾を避けて首を斬り落せるかも知れないんだが……。

やっぱり、この暗さをなんとかしないと駄目かな。

周りは既に黒く塗り潰されてるから、後は何かの明かりで周りを照らすしかないか。

土産コーナーにあるライトでも使わせて貰うか？……いや、あそこも黒く塗り潰されてるから無理か。

だとすると、他の明かりを捗さないと行けないんだが……何か在るか？

「…………あ、アレならいけるかも」

アレ以外に思いつかないし、ここは試してみるか。

そう決めた俺は、刀を片手で持ち、脇構えで刀を構え意識を集中する。

意識を集中し始めると、刀身から蒼い光で少しづつ輝き始めた。

コレが俺の考え方。刀を出す時に出る光で辺りを照らす方法。

……本当は足元から光が立ち上ると思っていたんだけど、多少は見える様になつたから良いか。

流石にロビー全体を照らす事は出来ないが、尻尾の動きが見えれば十分だ。

俺は刀を握り締めて、もう一度蛇に立ち向かつて行く。

一気に間合いを詰めると、蛇は自分の尻尾で叩き付けるように攻撃して来た。

さつきは暗くてよく見えなかつたけど、今度は蒼い光のお陰で奴の攻撃が見える。

俺は左足で強く踏み込み、叩き付けられる前に斬り落とした。

「 ッ――！」

俺は蛇の叫び声を無視し、更に踏み込んで頭を斬り捨て様としたが

「なッ？！」

奴は、剣を振り下ろすよりも早く俺に巻き付いてきた。

蛇に力一杯締め付けられると、身体の中から何かが軋む音を聞いた。

あんまり考えたくないけど、今のは骨が軋む音か。コイツ、どんな力で締め上げてるんだよ。

「グッ……」

骨が折れる前に脱出したいけど、締め付ける力が強くて身動きが取れない。

刀を持つて いる手は無事だが、こんな体勢じゃ上手く刀を振るえない。少しずつだけど、締め付ける力が強くなつて來てるから早くしないと本当に不味いな……。

俺は闇雲に刀を振るうが、蛇には掠りもしない。

それどころか、下手に刺激したもんだから、蛇は締め付ける力を更に上げて來た。

「～～～～ッ――」

……今、何かが折れる様な嫌な音が聞こえて來た。

本当に折れたか分からなければ、もしかしたら骨に蟻が入ったのか
も。

どちらにせよ、コレ以上締め付けられたやバイン……。脱出できるか分からぬけど、思い付く限りの手を使うしかない！

俺は刀を逆手に持ち替え、思いつきり蛇の身体に深々と突き刺した。

「 ッ……！」

刀が刺さつた蛇は痛みから暴れ出すが、今の俺にはそんな事関係ない。

俺は刀を力一杯振り上げ、蛇の身体を斬り裂いた。

この時に重要な器官でも斬り裂いたのか、蛇は絶命し、叫び声を挙げる事無く消滅していった。

蛇が消滅した事で、俺は漸く締め付けから解放されるが……激痛で喜ぶ余裕が無かつた。

「……今日は本当に危なかつたな。あのままだつたら殺されてたかも」

油断してた心算はないが、俺はまだまだ弱い。

幾ら鍛練を始めたからって、直ぐに結果が出る訳じゃないのは分かつてる。

……でも、毎回こんな調子じゃ、命が幾つあっても足らない。

強くなる為には鍛練を続けるしかないけど……一人で素振りして強く為れる訳無いよな。

やつぱり、祖父ちゃんの元で一から鍛えて貰わないと駄目かな？

「…まあ、それは休んでから考えるか

俺は立ち上がりつて部屋に戻るつとしたが、周りはまだ黒く塗り潰されていた。

元凶だと思つていた蛇を倒したのに、なんでまだ黒くなつているん

だ？

……まさか、蛇の他にも影が居るってのか？！

そう思った俺は、直ぐに周りを警戒し始めた。……すると、俺の左腕に黒い紐の様な物が巻き付いた。

一体何が巻き付いたのか、腕に付いた紐の先を見てみると……其処にはデカイ蛙の姿があった。

「蛇の次は蛙かよ……」

一体同時に戦わなくて良かつたと思う反面、ボロボロの身体で連戦しないといけないのかと思うとゲンナリして来る。

……とは言え、このまま逃がす訳にもいかないし、わざわざ片付けるか。

そう思い、俺は刀を構えると……舌が巻き付いている腕に違和感を覚えた。

如何してか分からぬけど、巻き付かれている腕の感覚がない。

一体何事かと思い、腕に目を向けると

「…………うや……だろ」

左腕が黒く侵食されつつあった。

少しずつ黒くなつて行くのと見て、俺は直ぐに巻き付いている舌を斬り落とした。

しかし、蛙は斬り落とされる前に舌を引っ込めてしまつ。

「クソツ……」

俺は悪態を付くも、腕は既に二の腕まで黒く侵食されている。さつきの戦いのダメージも抜けてないのに、片腕を使えなくされたのは不味い。

それに、ゆつくりだけども少しずつ侵食範囲が広がつて来ている。
あんまりノンビリしてゐる暇も無いし、手早く片付けるしかないが
：ハンデがでか過ぎるだろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0985x/>

受け継がれる力

2011年10月10日03時25分発行